



TITLE:

過剰決定から構造的因果性へ

AUTHOR(S):

前川, 真行

---

CITATION:

前川, 真行. 過剰決定から構造的因果性へ. 人文學報 1997, 80: 145-169

ISSUE DATE:

1997-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48509>

RIGHT:

## 過剰決定から構造的因果性へ

前 川 真 行

はじめに

- 1 過剰決定とはなにか
  - 1-1 その概念の成立
  - 1-2 それは何を批判しているのか
  - 1-3 因果性の分析へ
- 2 構造的因果性について
  - 2-1 完全決定の問題
  - 2-2 問題はどこにあるのか
  - 2-3 構造的因果性とは何か
  - 2-4 完全決定から過小決定へ
  - 2-5 アルチュセールの取り組み

おわりに、不確定な唯物論

は じ め に

『資本論』というこの雄大な著作には、ごく単純にいて、人類の歴史の三大発見のひとつが含まれている。すなわち、科学的認識にたいして、われわれが「歴史の大陸」と呼ぶことのできるものを開く、諸概念の体系の（したがって科学理論の）発見である。マルクス以前に、それと比較しうる二つの重要な「大陸」が、科学的認識にたいして開かれていた。5世紀のギリシア人による数学の大陸と、ガリレオによる物理学の大陸である。

われわれはいまだに、この決定的な発見の大きさを測り、その理論的諸帰結のすべてを引き出すまでにははるかにいたらない。[Althusser 1969, p.141]

マルクスは歴史の大陸を発見した……。だがその大陸にわれわれは上陸しているのだろうか。われわれはその歴史の大陸を、新たな「科学的認識」を、いったいどのように受け取るべきなのか。アルチュセールは「過剰決定（＝重層的決定）*surdétermination*」という概念によってそれに答えるだろう。社会構成体は（それ以前の社会とは異なり）さまざまな審級（政治的、文化的……）において生みだされる諸矛盾によって決定されている。その諸矛盾の複合は、単

一の「原因」へと還元されない。すべてを説明する万能の鍵は存在しない。マルクスが発見したのはこのことであるとアルチュセールという。だがじっさいのところ、われわれは社会構成体が過剰決定され、不透明で複雑な全体であることなどは、すでに知っている。もはや誰も古典的な経済決定論を、額面通りに信じてはいない。とはいえ、われわれは本当にそれを「知っている」のであろうか。しばしばアルチュセールにたいしてなされる「理論的に曖昧」であるという批判の多くはこの点にかかわっている。とりわけ英米の哲学者、あるいは彼らに影響を受けた経済学者たちの多くは、彼の理論に修辞以外のものを見出してはいない<sup>1)</sup>。過剰決定の論理に、単なる非決定、修辞に満ちた不可知論しか見出さない。そして、残念ながら、その批判はある部分で正当である。

読者諸君にも考慮していただきたいことは、わたしは、使用している概念にできるかぎり厳密な意味を与えようと努力している点であり、これらの概念を使用するためには、この厳密さに注意をはらわねばならず、しかもこの厳密さが空想的でないかぎり、それに同意しなければならない点である。指摘しておきたい点は、理論の対象が要求している厳密さに欠ければ、理論、すなわち用語の厳密な意味での理論的実践は問題になりえないということである。[Althusser 1986, p.285]

このように述べるアルチュセールの意図とは裏腹に、過剰決定という概念を事実としてではなく理論として扱おうとすると、いくら彼の言葉を引用しても、そこに積極的なものを見つけることは難しい。アルチュセールはこの概念の周囲を旋回し、それを画定しようとするだろう。そして彼は「構造的因果性」という概念によってそれを別の角度からとらえなおそうとする。

この論文におけるわれわれの目的は、過剰決定および構造的因果性というアルチュセールの用いた概念をできるだけ明確にし、その単純さを示すことである。その単純さがもたらすのは、根本的な態度変更である。それは、われわれに新たな理論の役割を告げるだろう。概念を理解するのではなく、運動させること。何かを知るのではなく、変形すること。そしてそれを実践の中に投げ込むこと、である。

## 1 過剰決定とはなにか

### 1-1 その概念の成立

#### ● アルチュセールはどのように用いているか

理論的な検討の前に、この「過剰決定」の概念をアルチュセールがどのように用いているか見てみよう。結論を先取りする形でいえば、「原因－結果」ないしは、「本質－表現」というモデルの批判という役割をこの概念は担っていた。それは「あらゆる個別的矛盾は、『本質的矛盾』の解決後には解消されているであろうし、またそのときにしか解消されないであろう」というロシア・マルクス主義の前提にたいする理論的闘争でもあった<sup>2)</sup>。とはいえ、この名高い過剰決定の概念それ自体が、検討の対象として主題的に扱われることは必ずしも多くはない。それは、この概念がある種の解答として受け止められたからである。その結果、「最終審級による決定」や、「上部構造の相対的自立性」といった概念をめぐる、あるときは抽象的かつ哲学的な、あるいは逆に、いささか天下りの断罪といった「アルチュセールをめぐる話題」へと還元される<sup>3)</sup>。ある概念の別の概念への横滑りは、同じ問題の反復にすぎない。もちろん完全な解決が必要であると言うつもりはないが、最低限の分析は必要であろう。まずアルチュセール自身の定義を見てみよう。

「矛盾それ自体は、核心においては、それら（諸審級）によって影響され、同じ一つの運動のなかで、決定するものであると同時に決定されるものでもあり、・・・社会構成体の様々な水準と様々な審級によって決定されるものである。それゆえ、われわれは、矛盾は『原理的に言って過剰決定される』ということができる。」[Althusser 1986, p.165]

アルチュセールはこのように述べて、諸矛盾が、それを生みだす社会構成体全体の構造から切り離すことができず、複数の審級によって決定されているがゆえに、社会＝国家の唯一の本質に還元可能な（ヘーゲルの）矛盾とは「異なる」ことを主張する。これが「矛盾は原理的に言って過剰決定される」ということの、この時点における説明である。だが率直に言ってこの説明は理論の提示ではなく、テーゼの提示にとどまっているといわねばならない。つまりなぜ、どのようにして、過剰決定というきわめて特異な決定の形式が成立するのか、あるいは過剰決定されることで何が変わるのか、という点にかんしての理論的分析が充分であるとはいえないのである。もちろんヘーゲルとの、つまり単純な経済決定論との差異において、社会構成体の複合的な構造の性格をある程度は記述している。その点では評価すべきだろう。だがその理論的な水準に立ち入って考えようとしたとき、きわめて重要な概念として用いられているにもか

かわらず、その意味が明確であるとは言いがたい。それゆえ、その働き、作用から、この概念の内包を構成しなければならない。

●それはどこから来ているのか

メカニズムの検討に向かう前に、この概念の出自について確認をしておく。もともとこの過剰決定という概念はフロイトからきている。アルチュセールは、精神分析という異質な領域の概念を、あえてその名前を変えることなく全く異なる領域に接合しているのである<sup>4)</sup> 彼はこの概念の固有の意味を認め、それゆえに、みずからの取り組みに利用したのである<sup>5)</sup>。フロイトによって精神分析に導入されたこの過剰決定（多元決定、優決定）という用語は、本来数学で用いられるものであるが、ことさらに難解なものではない。未知数の数より方程式の数の方が多い場合を考えればよい<sup>6)</sup>。このとき、解を求めようとしても、方程式の数が未知数にたいして余分になっているため一般には解が定まらない。そこでは意味は過剰に決定され、一つの項は複数の系列の中で、唯一の解を手にすることなく、個々の状況に応じた意味を背負わされることになる<sup>7)</sup>。（同様に「完全決定」および「過小決定」とでも呼ぶべき写像関係を考えることも等しく可能である。）つまり、この過剰決定という概念は、社会はあまりに複雑で予測しがたいといった非決定状態を表すイメージではない。それは、きわめて形式的かつ単純なモデル、ある写像関係のタイプなのである。そしてこれが「重層的決定」という従来の訳語に代えて、「過剰決定」というよりニュートラルな訳語を採用する理由でもある。われわれは、それゆえ、次のように問いかけたい。つまり、この概念が表現しているのはいかなるタイプの決定なのか、と。

1-2 それは何を批判しているのか

●過剰決定あるいは過小決定

前章で、語源についての検討を行ったのは、そこにこの概念の本質的な機能、すなわち写像としての性格があらわれているからである。われわれはあえてこの形式的な点にこだわってみたい。とはいえ、アルチュセールから離れ、恣意的に概念を定義しようというつもりはない。われわれの目的は、あくまで、彼の中で明示的には言われていないが、概念として存在するものを明示的に再構成することである。そのために彼の言説の中の幾つかの「徴候」に注目したい。

アルチュセールは『マルクスのために』以降も、この概念を何度か用いているが、そのさいつねに「過剰決定あるいは過小決定 la surdétermination ou la sous-détermination」（例えば、[Althusser 1996, p.293] [Althusser 1976, p.161, p.164] など）と併記している。ここで興味深いのは、ある程度、抽象的、形式的な水準でこの概念を捉えなければ、「過小決定」という言葉は意味を持たないということである。この点は重要な効果を彼の理論全体に与え

る。<sup>8)</sup>ともあれ、一歩ずつ進もう。このささやかな訂正を、もっとも単純な水準で受け取れば、過剰決定の概念は、あくまで「完全な決定系でない」ことの強調ともとれる。すなわち過小であれ、過剰であれ、完全決定された領域が対象とされているのではないことが主張されているととることができる。この完全決定された系を、形式的に分類するならば、そこで働いている決定の論理はいわゆる「同型写像」によって表現されるはずである。すなわち、逆写像が存在し解がつねに一意となる、そのような決定のタイプである。一般にそれは可逆的な模型であるとか、同時決定体系と呼ばれている。まずはこの完全決定の理論的意味を考える必要がある。

● 完全決定系。その概念。

なるべく単純に話を進めよう。松野孝一郎 [Matsuno 1989] は、同形写像による完全な記述を、原因に対し結果が常に一義的に決まる関係を強調するために、「一対一型写像」と呼んでいる<sup>9)</sup>。これは、ルーズに言えば方程式の数と未知数の数とが一致している場合であると考えてよい<sup>10)</sup>。松野によれば、この「一対一型写像」が成立することは、次の二つのことと同値である。(1)対象の初期状態が「理論上は」完全に同定できる（境界条件の完全同定）。そして(2)初期状態と、運動を司る規則とが、独立に決定できる（境界条件と拘束条件との完全分離）<sup>11)</sup>。たとえばニュートン力学の運動方程式においては、物体の質量と加速度が与えられた瞬間に、「それ以後の」すべての運動（軌跡）は式によって完全に決定され、また（当然のことだが）質量と加速度を測定しているあいだに式が変わってしまうということもない。

これは決して物理学に限られた問題設定ではない。思想としての完全決定は、さまざまな領域において暗黙のうちに採用されている。たとえば、経済学でしばしば用いられる「*ceteris paribus*（その他の条件が等しいならば）」は、まさにこのことを指している。経済学はもともと市場の理論として成立した。市場はさまざまな政治的情念を調整し、それらを価値として表現する。このとき万民の万民にたいする闘争は、社会体を破壊する全面的な無秩序をもたらすどころか、平和ないしは調和の条件となるだろう [Rosanvallon 1979]。市場のこうした機能を表現するものとしてワルラスらによって採用されたのが、いま述べたような同時決定体系に他ならない。それは市場の秩序を（諸力の）「均衡」という概念によって理解したのである。そのもっとも洗練された形式が「一般均衡論」である。経済主体は市場において一定の制約の下で、みずからの財の価値を最大化するべく行動をとる。そのとき社会における財の分配が最適なものとなる均衡点が存在し、なおかつ自由競争は初期資源を再分配し、（均衡点において）最大の効率を達成する。これが新古典派の格率であるが、一般均衡論はその要石たる均衡点の存在証明であり、そのための理論的な条件を明らかにしているのである。

もっとも、現実には初期状態を完全に同定することは困難である。だが、たとえ確率分布という形であれ、その分布が一意に決定できる以上それは一対一型写像として記述される。<sup>12)</sup>われわれがいま問題としているのは、その解釈や実際の適用の場面ではなく、あくまで「理論上」

の問題としての完全決定という概念である。

●時間の概念の排除

完全決定系の理論的な意味、つまりその概念は以上のようなものである。ただしわれわれはこれを間違った考えであるというつもりは全くない（そんなことをすればほとんどすべての科学の結果を放棄しなければならない）。ただ、このような認識を可能にする立場が依拠している前提、つまり特定の「問題設定」を可能する認識論的な前提を問題としているのである。結論を先取りするならば、そこには二つの意味における、「理論の内部」からの時間の排除がみられる。

まず第一に、この完全決定系においては時間の機能を表す概念は存在しない。もし存在するとすれば、この理論を解釈する者の心の中だけである。初期状態の決定が運動の軌跡の確定と同値であるということが意味するのは、そこには厳密な意味での因果関係が存在しないということである。そもそも、因果分析の追放こそが、「科学としての経済学」の成立ための要件であった。というのもそれはマッハによって押し進められた物理学の変革を模範としていたからである〔塩沢 1983,p.44〕。ひとつの運動方程式から、リンゴが落ちれば三秒後に地面につくだろうと未来形で述べることも出来れば、落ちたリンゴは三秒後に地面についた、と過去形で述べることもできる（物理的時間の可逆性〔渡辺 1975〕）。また、運動方程式によって記述される対象に外部から攪乱を加えた場合、記述の式が完全決定系であるために、軌跡のすべてがいちどに変更されねばならない。すなわち、素直に解釈するならば、「理論上」は系全体に一瞬にしてその変更が伝わっているはずである。そもそも同時決定体系とはまさにそのような意味で「同時」なのであり、理論の中に「時間」を反映する内在的要素は存在しない。

第二に、認識を行う者と対象とは、完全に分離されていなければならない。もちろん、この外部とは空間的なそれではなく、位相的、つまり理論的な外部であり、認識者が対象に影響を与えることのない理論的な外部である。もっともこの程度のことはたえず指摘されつづけている。問題はそれが可能になる条件である。それは松野が明確に指摘するように、認識のさいに対象から認識主体へ伝わる「情報の伝達速度が無限大に発散」していることである〔Matsuno 1989〕。たとえば、木から落ちるリンゴを観察するということは、情報の伝達が光速で行われていることに他ならない。これほど極端でないとしても、対象の挙動を一挙に確定できるという理論的想定がある種の近似として容認されるのは、情報の伝達速度を無視しうる場合のみである。つまり「主体と客体を分離」する問題設定が可能であるということは、主体の対象にたいする「観測時間が無視できる」ということなのである。そこに欠落しているのは、人間の有限性あるいは身体性であるということが出来る。理論の内部に「認識の有限性」を反映する要素が導入されていないのである<sup>13)</sup>。

●時間性、有限性、身体性・・・

理論の内部からの「時間の概念」の排除、これが完全決定系の理論的な限界であり、過剰（過小）決定の概念がかかわるのはこの点である。また完全決定の概念は、観測速度の発散によって対象から分離された観測者、すなわち「主体－客体」図式を必然的に導入してしまう。この図式から脱出するには、理論の内部に「時間の概念」を導入しなければならない。抽象的にいえば、それは理論の内部に「身体性＝物質性」の要素を導入することであろう。とはいえ、重要であるのはそれについての思弁ではなく、理論の内部に明確に影響を及ぼすかたちで、つまり「概念」としてそれを導入することである。時間性の概念、その構造を手懸かりに検討を進めてゆきたい。

だが、われわれはその形式的な側面をあまりに強調しすぎてはいないか、との疑問を抱かれるかもしれない。つまりこの考えかたにアルチュセールの名前を帰属させることは適当なのだろうかという。だが過剰（過小）決定の問題を「主体－客体」図式とのかかわりにおいて、つまり認識の問題として捉え直すという視点は『資本論を読む』においてアルチュセール自身が進んだ方向でもある。とりわけその中の論文「資本論の対象」の主題でもあった。「マルクスの絶大なる理論革命」と題されたその最終章は、まさにわれわれが今まで行ってきたような完全決定系にたいする包括的な批判に捧げられている。

### 1-3 因果性の分析へ

少し長くなるが最初にアルチュセールの説明を引用する。

極めて図式的にはあるが、次のようにいうことができる。古典的哲学（現存の『理論』）は、すべてをひっくりめて、ある効果を考えるさいに二つの概念のシステムで考えてきた。まずデカルト主義に起源を持つ機械的システム。それは因果性のある推移的で分析的（解析的）なものに還元している。それは・・・要素に対する全体の効果を考察するためには不適切なのである。そのため第二のシステムが提出された。全体の要素に対する効果を説明するもの、すなわちライプニッツ主義者の表出の概念である。このモデルはヘーゲルの思考全体も支配している。このモデルは原則として、全体は唯一の内在的な原則、つまりその内的本質に還元でき、そしてそこでは、全体の諸要素は現象的な表現（表出）形態に過ぎないということを前提している。それゆえ本質の内在的原理は全体のそれぞれの点において存在し、その結果、つねに直接対応の等式を書くことが可能なのである。すなわち、それぞれの要素（経済的、政治的・・・）＝全体の内的本質という等式である。・・・しかしこの内的本質、外的現象というカテゴリーはある全体の性質、まさに全体の『精神的』な性質を前提している。そこでは個々の要素はまったく全体性の『全体的部分』が表出する



ものなのである。[Althusser 1996, p.402]

『マルクスのために』の段階では、とりわけヘーゲルが仮想敵とされていた。ここでもヘーゲルはライプニッツとともに表出モデルを代表し、さらにデカルト（そしてニュートン）の「機械的システム」と併せて検討の対象とされている。（この二つのモデルをアルチュセールにならってそれぞれ「表出的因果性 *causalité expressive*」, 「機械的因果性 *causalité mécanique*」と呼ぶことにしよう。）それらは「経済現象の場」の「深遠で複雑な空間」, その「複雑性」を表すことができない。それは何かを明らかにする以上に、隠蔽してしまうのである。過剰（過小）決定された「場 *champ*」の固有の性格、つまりその決定の論理としての「構造的因果性 *causalité structurelle*」を明らかにするために、彼は、まずこの二つの概念の批判から出発する。

#### ● 機械的因果性および表出的因果性について

ここで簡単に二つの因果性の説明をしておこう。まず機械的因果性であるが、これは「線形 *linéaire* の因果性」とも呼ばれ、「決定された結果が、原因－対象、つまり別の現象に結びつけられうる」ような決定の論理である。しばしば近代における力学的パラダイムなどと呼ばれるものといってもよい。アルチュセールは、この因果性によって記述される空間の例として従来の経済学によって構成された「経済空間」の例を挙げ、それが「同質的」あるいは、「直接的に可視的、かつ観察可能」なかたち記述されていることを指摘している。明らかにこれはわれわれが検討してきた完全決定系と呼ばれるものに直接に対応している。ただしアルチュセールはこの論理を、ある要素が別の要素に与える「原因－結果」の関係のみを表すものとして限定的に捉えているため、この因果性についての分析は次の表出的因果性と比して、それほど重視されていない。いずれにせよ、「原因－結果」を同一平面上で扱うことによって、ここでも概念としての時間発展は理論から排除されている。

つぎに「目的論因果性」とも呼ばれる「表出的因果性」を取り上げる。これは、引用からも分かるとおり、もっぱら全体の部分にたいする関係を表すものである。すでに過剰（過小）決定の概念を考察したさいに、主たる批判の対象であった以上、当然のことともいえるが、アルチュセールの論考を検討するかぎりでは、この表出的因果性もまた完全決定系の性質を保有している。それはとりわけ「歴史的時間の概念」の問題をめぐる明確になる。アルチュセールにとって、歴史的時間についてのヘーゲル的な立場は時間概念の不在によって特徴づけられる。彼の言い方を借りるならば「歴史的時間についてのイデオロギー的な考え方」である。つぎにこれを見てみたい。

#### ● 連続性と同時性

まずアルチュセールによればヘーゲルの全体は、一般に理解されているかぎりでの「通時－

共時」という組み合わせによって規定される。アルチュセールは、それぞれの性格を時間の「(同質的)連続性」と「同時代性」と規定している。規定的であるのは後者、「同時代性」である。それはヘーゲルの構造、「すなわち（個々の要素の）存在のすべての決定における、概念の全体的現前」によって基礎づけられている。

（ヘーゲルにおける）歴史的時間の構造とは、次のようなものである。すなわち、つねにすべての要素が、同じ時代、同じ現在において完全に共存し、それゆえ、同じ現在において、諸要素はたがいに同時代的である。[Althusser 1996, p.276]

その結果、「ヘーゲル的な社会全体の構造」は、ある時代を切りとる「本質的切断」によって規定される。その切断を可能にし、「同時代」に共存する個々の要素を結び付けるのは、時代精神という「共通の本質」である。それらは「全体的部分」として、それらの諸部分を包み込む全体の本質を表出する。それゆえに、この本質としての時代精神はいかなる要素においても直接的に読み取ることが可能となる。この「同質性」そして「可読性」こそが規定的となる。時間を表すはずの通時という概念も、純粋な延長における直線としての同質な時間軸、すなわち（ベルグソン流に言えば）空間化された時間にすぎず、先取りされた目的＝終わりに向かう単線の発展でしかない。イデーの弁証法的発展も、この「時間の同質的連続」を前提している。

一方において概念の存在の連続性が、その連続性の契機 moment としての「理念」の自己運動としてあらわれ、他方でその理念を表出する（全体における）要素としての現象が本質的切断によって現在という瞬間 moment の下に包摂される。この構造を決定しているのはこの同質的連続性と同時代性なのである。それゆえ、この哲学の内部では現在が「絶対的な地平」を構成し、その結果「誰もみずからの時代を超えることはできない」ということになる。表出的因果性がしばしば目的論的な思考としてあらわれるのは、現在へと至る道筋を常に「事後の立場」から必然的な歩みとして特権化し、その結果、その歩みの過程において自らを「必然性」としてを表出するからである<sup>14)</sup>。

われわれがここに見出すのは、まさに時間軸という直線にそって並べられた、それぞれの時代のイデーを反映する、いくつかの「垂直的切断」の断面図である。そこにあるのは、「イデオロギー的時間」、空間化された時間である。あえて言うならば、もっとも平板化されたかたちでの構造主義である<sup>15)</sup>。この意味で、歴史時間の「概念」がそこには欠落しているのである<sup>16)</sup>。

#### ● 歴史的時間の概念の消去

われわれはこの二つの因果性に同じ問題設定を見ることができる。アルチュセールにとって、

「主観－客観」図式の批判は、一貫したモチーフであった。機械的因果性にせよ、表出的因果性にせよ、主体は対象から切り離され、超越的な地位を受け取り、対象の側は同質的、無時間的な性格を表す。この二つの因果性に見られる諸要素の完全な「意味づけ」と、その必然的な帰結としての時間性＝歴史性の消去、つまり等質な空間での諸要素の共存という性格は、同時決定体系、一対一写像のモデルの単純な図式の中に過不足なくうめ込まれている。アルチュセール自身は、表出的因果性の批判をより重視しているが、彼の批判と上で述べた完全決定系の問題点とは見事に重なりあっている。

繰り返せば、認識の主体が理論空間の外部へと排出されること。そして、対象の側を一挙に把握し、対象の側を同質的な空間と捉えることによって、理論の内部における「過程」や「発展」、つまり「歴史的時間」の概念を消去すること。つまり、すべてが無時間的な地平のなかで推移すること。これがアルチュセールが、否定しようとしたものであり、「過剰決定、および過小決定」という概念が目指していた批判の対象である。われわれは否定すべき対象はつかまえることができた。ようやくわれわれは先に進むことができる。つぎのステップ、すなわちこの過剰（過小）決定の積極的な問題、その決定の論理として構造的因果性の分析は、『資本論を読む』のなかで行われている。つぎに、この構造的因果性のメカニズムについて検討しよう。

## 2 構造的因果性について

『資本論を読む』を一読して、最初に違和感を感じるのは、なによりもそれが「認識論」を扱っていると思えない点である。たとえばホブズボームが、

アルチュセール氏がマルクス主義の立てた歴史や経済が何をなしえるかあるいはなしえないかという水準から降りて現実的な問題に向かうや否や、彼は新しいことも興味あることもほとんど語ってはいない。[Hobsbawm 1966, p.6]

というとき、彼が感じている不満はおそらくこの点にかかわっている。確かに、この書物は「歴史や経済」に何かを言おうとするそぶりを見せながらも、実際には「ほとんど語ってはいない」。（とりわけ冒頭におかれた『資本論』からマルクスの哲学へ」と題された章は、「読むこと」をめぐる認識論的な探求に終始している。）しかしわれわれは次のように主張したい。すなわち「歴史の科学」が対象としている「深淵で複雑な空間」を、アルチュセール（そしてマルクス）の「認識論」のありかたと切り離して考えることはできないと。彼は理論と実践の単純な二分法そのものを問題に付していたのだ。

ただし、理論的な分析を急ぐ前に、確認しておくべきことがある。つまり複雑な空間としての「経済現象の場」を完全決定系として捉えることには、どのような不都合があるのかということである。まず簡単にこの問題を確認し、その後に、そうした「場」はどのようなものであるのか、「構造的因果性」とはどのようなものであるのかを検討する。

## 2-1 完全決定の問題

経済学においても、近年まで、この同時決定体系をもとにモデルが作られてきたことはすでに述べた。アルチュセールが、過剰（過小）決定という概念を用いて批判しようとしたのは、こうした発想に代表されるある種のイデオロギー、社会なるものへのまなざしであった。このようなイデオロギーの問題性は、とりわけ経済学において集中的に表現されてきた。ひとつにはそれが社会という、容易に把握しがたいシステムを対象としていたこと。そして第二に、経済学がいわゆる人文社会科学のなかでは、いち早く制度化に成功し、数学を利用した記述が一般化していたこと。さらに、批判者としてのマルクス主義がまさにこの領域において、その理論的基礎を築いていたために、学そのものの立場性がつねに問題視されてきたことなどの理由が考えられよう。ただし残念ながら理論の内部に立ち入って、その暗黙の前提を明らかにするという検討は十分になされてはこなかった（数少ない例外が塩沢由典である）。彼が言うように経済学においてその思想性を理論のレベルでよりよく表現していたのは、前に述べた「一般均衡論」である。

その一般均衡論が、同時決定体系という枠組に依拠したことで孕まざるをえなかった問題は、今までの検討から帰結する結果と一致している。つまり、均衡論は投資、予測、そして信用としての貨幣を、すなわち「時間」の概念を理論の内部でうまく扱うことができないのである。複数の論理的平面に属するはずの事象を同一平面上で取扱うために、不確実なものとしての未来が犠牲にされているのである<sup>17)</sup>。完全決定されたモデルは、定常的かつ空間的に限定された狭い範囲の一時点の構造を描きだすことに適しているが、現代の資本主義社会の全体構造を考えるには不適切なものなのである。

逆に、アルチュセールが『資本論を読む』の中で指摘しているように、マルクスの分析においては、経済的時間の構造が明示的に検討の対象とされている。つまり、マルクスの分析は、経済人という要素からではなく  $G-W-G'$  あるいは  $W-G-W'$  という資本の「運動」ないしは「発展」の図式から出発している。ヘーゲル的な本質的切断とは逆に、全体の構造は、これらの運動によって、すなわち「時計によって計られる時間（＝同質の時間）」ではなく、個々の資本家ないしは産業において生成されるリズムによって構成されている。異なった時間平面を構成する複数の資本の運動が、交換を媒介として連結されることで、経済空間の構造は理論の内部において、ズレと矛盾をはらむ「複雑な場」として、空間と時間によって構成される時空

多様体として扱われている。完全決定系の問題は、こうした「場」それ自身の構造を積極的に扱おうとしないことにあるともいえる<sup>18)</sup>。

場としての市場が、「完全決定系」によってうまく表されない理由は、それが内部に「時間的構造」を含むからである。(具体的な例として、取引相手の遠近、知識の伝播範囲、行動の効果の到達範囲などがある。)この指摘は一見単純に見える。しかしこうした時空多様体として定義される場は、特殊な構造を持っている。それは(とりわけ観察者の)時間構造を考察することにかかわっているのである。

## 2-2 問題はどこにあるのか

上の例に見られるように、完全決定系の拒否は、空間を(デカルト的延長ではなく)固有の性質を持った場として捉えることにつながっていく。場それ自身を分析すべき対象として考え、理論の内部に時間構造を積極的なものとして導入することは、具体的にどのようにして可能になるのか。われわれがつぎに検討するのはこのことである。あらかじめ結論を先取りするならば、それは主体を場の制約を受ける一種の「身体」をもったものとして考えることでもある。それが暗黙のうちに前提されている超越的な視点を拒否し、認識主体そのものを、自らがそこに属する場において捉えることの帰結なのである。

### ● 計算時間 (= 認識の時間) の問題

塩沢 ([塩沢 1990]) によって提出された、きわめて単純で興味深い例を挙げよう。近年、コンピュータの発達とともに、計算量そのものが検討の対象とされるようになった。というのもコンピュータに計算させるさいに、理論的には解の出るはずのプログラムを走らせても、実際の計算が無限大に近い時間がかかるようでは、それは解けないのと同じことだからである。ここでは計算そのものが理論的考察の対象となっている。経済学が想定している合理的経済主体についてもこの問題は妥当する。彼らは価格をシグナルとして、一定の予算制約内で効用関数にしたがい効用を最大化しようとする。だがこれは上で述べたような計算困難な例なのである。ちょっとした買い物でさえ、まじめに(つまり経済学の理論的想定に則って)取り組むとなると、気の遠くなるような膨大な時間が必要となることが明らかにされている<sup>19)</sup>。おそらくはこうした困難を表面化させないために、経済学は神の如き計算能力を持った主体を想定している。とりわけ合理的期待形成仮説においては、まさに理論の積極的な要件として、この非合理的なほどの合理性をあらゆる経済主体が持っていることが積極的に仮定されている。この非現実性を笑うことは易しい。しかし問題はこのような非現実的な仮定を取り入れざるをえないことである。これは理論の中枢にかかわる問題であり、それを小手先の工夫で回避することはきわめて困難なのである。

われわれにとって興味深いのは、計算量を考慮することは、計算主体の物質性を、時間の概

念とのかかわりで問題にすることである。もちろん、前に述べた経済的時間、ないしは歴史的な時間と、ここで述べられている計算時間とは直接につながるものではない。だが計算時間を考えることは、かつては理論の外部へと排出されていた認識主体を場の制約に従う一種の身体を持ったものとして考えるということでもある。それは認識を、現実を鏡に写し取るように無時間的に行われるものとしてではなく、それ自身固有の長さとメカニズムを持った認識過程として考えることの帰結であり、時間の概念を空虚な延長としての外部から導入するのではなく、認識者そのもののうちに、その内的論理を構成するものとして導入したことの帰結なのである。

#### ● 認識の問題

おそらくこの例は問題のありかを的確に指し示めている。認識主体を理論的内部へと埋め込み、計算時間を考慮に入れることは、事実上、境界条件の完全決定を諦めることにほかならない。経済学においては、さまざまな「知識」についての問題が重要な争点をなしてきた。物価、景気動向、流行、将来の予測……。ここで注意すべきは知識の物質性＝身体性である。物価や景気動向は、つねにこうした（必然的に不十分な）知識によって大きく影響を受け、さらにそれが人々の予測形成にフィードバックする。そもそも経済秩序においては知識そのものよりも、その作用を重視すべきである。そこにおいて知識は、何らかの形で生かされてはじめて経済的に意味のあるものとなる。つまり知識はつねに現実態として扱われているのである。同様のことはマルクス主義の文脈では、イデオロギーの問題として扱われてきた。まさにイデオロギーこそは、認識の物質性をあからさまに表現するものであった。例えば経済人というイデオロギーは、そのイデオロギーを信じるすべての者が、それに則って行動することでみずからに（自己言及的に）根拠を与える。複合的全体としての空間＝場を認識する主体は、つねに／すでにその場の制約を受け、その行動はつねに／すでに場そのものを構成する。いずれにせよ経済秩序においては、認識そのものを問題化するモメントが、あからさまに露出しやすい。

典型的な例としてしばしば言及されるものにケインズの美人投票という比喩がある。彼によれば、金融商品の価値は、一種の美人投票によって決定される。だがそれは、投票者が美人であると思う女性／男性へなされるのではなく、多くの者が美人であると思うであろう女性／男性への投票なのである。ここには、経済的価値において、対象の本質（美人か否か）ではなく、対象がどう思われているかということ、すなわち間主体的な場こそが重要であるということが含意されている。こうした原理によって進行するスパイラル状のドライブがバブルである（土地はすべての人が上昇すると信じているかぎりで上昇する）。もし時間構造を捨ててしまえば、ここから一般に想定されるような動的なシステムは形成されない。もし他人の意向を知るためのコストが一切存在しなければ、それは全員一致という均衡点に収斂するしかない。つまり、この例は他人の行動についての予測が何らかの意味で不確かであることが暗黙のうちに前提されなくては意味をなさないのである。こうした自己言及的構造がトリヴィアルでない意

味を持つのは、あくまである種の時間構造を考慮にいれ、動的なシステムにおいて考えるときのみである。つまり（後述のように）完全な記述が不可能であると考える場合にのみ、自己言及構造としても意味のある例となる<sup>20)</sup>。

まとめておこう。マルクス、そしてアルチュセールが対象とした複雑な空間を検討するさいに、時間性の概念を中に含んだ構造を考えねばならないのはこのためである。認識主体を有限な身体性を持った存在と考えることで、身体性を持った諸要素によって構成される空間的・時間的多様体としての場は、誰もその外部に定位することのできない限界を内側から構成する（「内在性の平面」）。次にわれわれはこの場の性格、すなわち構造的因果性の論理について検討を行う。

## 2-3 構造的因果性とは何か

### ● 内在性の平面

唯物論とは、身体についての思考に他ならない。それは認識主体を身体を持ったものと考えることである。それは有限性を、欠如として考えるのではなく、そこから出発し、その有限な身体としての「概念」を理論の中で運動、そして展開させることである。認識は、かつては観照として、対象を鏡に映す反映であった。もはやそれは場に制約され、固有の過程を持った実践となる。しかしそのためには根本的な立場変更が要請されている。われわれはそれを「内在性」という名前でおこう。これはアルチュセールが構造的因果性を考えるさいに、提出した重要な概念である。

構造のその要素にたいする『喚喩的な因果性（筆者注：構造的因果性のこと）』における、原因の不在は、経済現象にたいする構造の外在性の結果ではない。反対に、結果（＝効果）における構造としての、構造の内在性の形態そのもの、なのである。これは次のことを意味する。つまり結果は構造の外にあるのではなく、対象でも、要素でもなく構造がそのしるしを刻印しにくるであろう、前もって存在している空間でもない。まったく逆に、構造はその結果に内在している。それは、スピノザの意味でその結果にたいする内在原因なのである。構造のあらゆる存在はその結果のなかにある。要するに、構造は、その要素にたいする固有の結合でしかないのであって、その結果の外にはまったく存在しないのである。

[Althusser 1996, p.405]

構造が結果に内在すること、つまり構造の運動そのものが構造の性格を規定すること、これが構造的因果性の要石である。その結果、本質－表現、つまり内と外という二分法は破棄される。だがこの「内在性」を、名前だけ用いたとしても、その概念を理解したことにはならない。

この内在性とは場の時空多様体としての構造に他ならない。それは全体構造における認識主体の場への（位相的）内属なのである。この点にかんして、少し異なった角度から見てみたい。

最初にこの内在性の固有の性格を明快な論理で説明したのは F. ヴァレラである。彼の提出したオートポイエーシスの理論は、一般に、システムの自己再生産過程そのものが、システムを構成する（＝みずからの境界を自己産出する）モデルとして説明されている。そのさいに、そこには「目的、機能、目標」がなく、さらにそのシステムには入力も出力もない（正確には区別できない）ということがよく強調される。だが、強調すべきは、むしろシステムの作動と観察（ないしは記述）の関係を切り離れた点にある。ヴァレラは対象の外部に存在する観測者によって記述されるアロポイエティック・システムと、内部から記述されるオートポイエティック・システムを明示的に区別している。それはあくまで、観察の視点の位相的な位置によってなされなければならない<sup>21)</sup>。

このオートポイエティック・システムを生成する内的な視点、つまり内部観測は、システムの動態の記述でもありと同時に、システムの動態そのものであるという二重性を持っている。彼の最大の貢献は、この点を明確に定式化したことにある。内部観測者の認識は、行為、実践としての側面を持つ。だがこのことは場を積極的に取扱わないかぎり概念としては成立しない。それには時間構造すなわち「時間性の概念」を導入する必要がある。認識が、観測という行為としての側面を持つ以上、この要素の導入は避けられない。というのも内的／外的の位相的、理論的区別は、松野が言うように観測における情報の伝達速度によって規定されているからである。情報伝達速度が無限大に発散している場合、認識者は対象の状態を一挙に観察可能である。つまり認識主体を外部に置くことができる。だが逆に情報伝達速度が有限である場合、つまり認識それ自体も場の支配を受けるとき、認識主体は対象の運動をいちどに確定することがもはや不可能となる。

このとき認識は、一方で認識を行う主体の内部に知識と呼ばれる効果を産出し、他方でみずからが場を構成する二重の実践となる。つまり、ある内在平面を構成するすべての運動は、認識であり同時に実践でもある。われわれが認識と呼んでいるのは、意識を持った要素＝主体の内側に認識実践の「結果＝効果」として産出されたその一面にすぎない。アルチュセールは、こうした内在性の平面のメカニズムを構造的因果性として定義しているのである。つぎに、彼が実際にどう描きだしているかを見てみよう。

#### ● 劇場としての哲学

彼は構造的因果性に触れるさい、しばしば劇場の比喩を用いている。たとえば論文「『ピッコロ』、ベルトラッチーとブレヒト」[Althusser 1986] の中で、彼は次のように述べている。すなわち（ごくごく単純に言ってしまうと）真の演劇は、舞台の上にあるのではなく、むしろ上演の効果として観客と舞台との間に生成するのであると。ここでは、観客、読み手の地位が



消極的なものから、積極的なものへと変化している<sup>22)</sup>。アルチュセールは観客について、「彼らは、芝居のおわった後、自らの実人生において新たな俳優として演じはじめる」とまでいうだろう。それはたんに知るだけではなく、その認識の効果、作用において考えるということであり、それが構成する場を考えるということである。もはや認識はそれ自体として独立して存在することはない。認識の生産は、認識主体である観客自身が、同時に新たな内在性の平面を構成しつつある過程でもあるのだ。

ただし誤解しないでほしいのだが、劇場の内と外という表現は、空間的な内部／外部ではない。つまり観念と現実という対ではないのである。なによりもマルクスが *Darstellung* という概念で、そしてアルチュセールが構造的因果性という概念であらわそうとしたのは、「内と外というありふれた分割の消去」なのであるから。このありふれた分割を、捨て去ることがなければ、アルチュセールの構造的因果性の意味するところ、「内在性」と「内と外という分割」との差異を、単に言葉の問題ではなく、概念として把握することは不可能である。われわれはそれを「時間性の概念」あるいは時間構造によって捉えようとしてきた。つまり認識の有限性、ないしは身体性という概念を理論の中で、運動させようと試みてきたといってもよい。つぎに、この内在性と時間性との連関を探りつつ、それらがどのような帰結を生むのかを考察したい。そこではわれわれはアルチュセールがなぜ、過剰決定に加えて「過小決定」という概念を付け加えたのか、その真の理由を知ることになるだろう。

## 2-4 完全決定から過小決定へ

### ● 分岐を含んだ過程

内在性の視点に立つということは、観測速度が有限であることと密接に関連していた。完全決定のシステムを拒絶することは、認識主体の有限性を認めることであった。それは認識対象の初期状態を完全には決定できないということから出発することといってもよい。境界条件が不完全にしか決定できない、つまり認識対象の初期状態が完全に決定できないということは、もしそれを数式で表した場合、余分な自由度が存在することを意味する。つまり一言でいえば、その系は「過小決定」されているのである。完全決定を前提する場合、対象が過小決定状態であるということは、観測が不十分であることを意味するにすぎない。だが内在性の立場に立ち、認識主体の有限性を「理論の中」に組み込むことは、この不完全性を欠落としてではなく、積極的なもの、それ自体で十全な決定として捉えるということである。これは「有限の立場」に立つということでもある<sup>23)</sup>。記述それ自体が自己言及の輪において動的システムの一部となるということでもある。

こうした立場から何が帰結するのか。このような「有限の立場」からは、原因と結果の間に一意の関係が成立しないことになる。真とも偽とも決定ができない命題が不可避免的に存在する

のである。つまり未来の状態の予測にたいしては、排中律は成立しない<sup>24)</sup>。未来を一義的に決定できない、分岐を持った系として対象を記述するということである。（というより記述それ自体がその系を構成する。）「過小決定」とは、この一般的な表現なのである。ただし一言注意しておけば、この「分岐」とは、自由意志による選択が可能な分岐ではない。選択が可能であるのは、選択を行う主体が対象の外部にあって、それをコントロールできる場合である。この内在性の立場に立つかぎり、自由と必然という二分法はここには当てはまらない。

#### ●生成としての理論

みずからの内部に不可避的に分岐を含む理論は、（過小決定され）余分な自由度を持っている。この場合、境界条件は、一時点においてはつねに不完全にしか決定できない。とはいえ現実には人は複数の過程を同時に体験しているわけではない。つまり、余分な自由度は時間発展にともなって解消してゆく。それは「潜在的なるもの」であった未来が、結果としての現在と「そうなるかもしれないなかったもの」という可能であったかもしれない世界へと分類されてゆく過程である。事後的に見れば、それは幾つかある可能な未来の中からひとつの現実が（あたかも必然的に）選択されていった過程としてみえるかもしれない。確かにすべての出来事がおわったあと、事後の立場においては、すべてが「こうなるはずであった」という必然の相において理解されるだろう。ヘーゲル的な表出的因果性とは、こうした立場からの記述に他ならない。

だがわれわれは内在性の平面においては、すべてが実践、あるいは作用として捉えられねばならないことをいった。内部からその過程を生きた場合、選択の過程とは、（いくらか不正確な言い方になるが）認識諸主体の相互作用によって、認識主体が属する場が生成展開してゆく過程である。認識はその効果として、場の中に新たな条件を付け加え、またその条件そのものを変化させてゆく。場を構成する諸要素、諸系列の相互作用の進展が場そのものを生成変化させてゆくのである。言いかえれば、「情報の伝達速度が発散していない」ため、境界条件を完全決定しようとすることで、認識主体の行為が認識対象としての場そのものの一部をなすのである。その結果、認識過程が拘束条件の生成と連動して現れざるをえない。この場合、認識は「予測＝記述」という相ではなく、「生成＝記述」という相であられる。認識は不可避的に「実践」たらざるをえない。まさに自己言及的な構造が生み出され、記述の対象を記述自身から完全に区別することはできなくなる。もはや、セマンティクスとシンタクスとを厳密に区別することはできない。こうした過程あるいは生成そのものとしての構造は、もはや完全に写し取ることはできない。むしろそれを生きる、ということになるだろう。

ちなみに、ゲーデル（というよりはここではローヴェルの理解にそったゲーデルというべきだが）が教えるように、内部観測が成立しうるような自己言及的な構造を持った体系について、それが整合的であるならば（排中律が成立する＝完全）、その任意の命題の真偽を判定しうるような論理式（真理関数ないしは証明関数）は存在しない。逆にいえばそれは次のことを意味

している。すなわち、整合性を維持したければ、あらかじめ超越的ないし普遍的に命題の真偽を判定しうる論理式をあきらめ、加算個の手続きによって個別に証明してゆかねばならない<sup>25)</sup>。つまりこのような対象を描きだす darstellen 理論があるとすれば、それは一種のシュミレーションとしての理論となるだろう。とりわけ、よい言語（ゲーデルの意味で完全な言語）でそれを描きだそうとすれば、そうなるほかはない。なぜならこれはコンピューターの停止問題と同型の問題であるからである。ある問題が解けるかどうかを、一般的に判定するアルゴリズムは存在しない。つまり実際にやらせてみるしかないのである。自己言及構造を仮定し内在性の立場に立つかぎり、システムの全体の運動について一般的に決定する理論は存在しない。もはやわれわれは完全な言語で記述することから離れ、新たな立場に立つことが求められている。

## 2-5 アルチュセールの取り組み

### ● 認識とは生産である

アルチュセールは、どのようにしてこの内在性の立場、構造的因果性という発想に至ったのだろうか<sup>26)</sup> それは『資本論を読む』において提出されている認識の理論、すなわち「生産の理論」を経由することで獲得されたといえる。彼は、マルクスが古典派経済学の比類なき読み手であったことを指摘し、そのマルクスの読解の方法を抽出する。そこで抽出された方法を、アルチュセールは「徴候的読解 lecture symptomale」と名づける<sup>27)</sup>。読みの対象となるのは、テキストにおいて明示的に言われていることではなく、むしろ明示的に言われてはいないが、「概念」として存在するものである。そして「読むこと」によって、その概念は姿をあらわす。あえていうならば、読む者とテキストのあいだで概念が運動することによって、読む者のうちに新たな効果を生産する。これは前に述べた劇場の比喻において語られていたことでもある。アルチュセールはそれを一言で「読むことは生産である」というテーゼにまとめる。われわれはそれを「認識生産」の理論と呼ぼう。この態度変更は徹底的であった。この立場はさまざまな困難にもかかわらず、アルチュセールが内在性の立場から逸脱することを防ぐことになる。それは、「何が言われているのか」という内容の問題から、「それはいかなる作用を持つか」あるいは「いかなる読みをもたらしたのか」つまり「効果＝結果」の側に重心を移動させたのである<sup>28)</sup>。

この「生産」という比喻は有用である。生産は、生産物に先立ち、そして投入物にさえ先立つ。まず生産過程という場こそが問題とされる。そこに何が投入され、何を産出するかは、二義的である。認識を生産として捉える以上、認識過程こそが一義的となる。自己同一的な二つの存在——主体と客体——から出発するのではなく、つねに変形と加工の過程が伴う生産過程から出発すること。それは存在ではなく、射から出発することである。まさに読むという行為、

認識という実践の過程が問題となる。主体が客体に影響を及ぼすのではなく、認識生産が主体と客体（として同定されていたもの）の関係を変換し、新たな関係を産出する。しかもこの過程は不可避免的に運動、すなわち時間の概念をはらんだ、動的な過程となる。

構造的因果性という概念は、このような考えかたに基づいている。それは、われわれが構造あるいは、構造主義という言葉から想像されるものとはまったく異なっている。むしろ、「いわゆる」構造主義とはまったく異なった考え方である。つぎにアルチュセールがこの運動性をどのように表現しようとしていたか見てみよう。われわれはいささか哲学的な記述に出会うであろうが、今まで述べてきたことを念頭において考えるかぎり、そこで述べられていることは、見掛け以上に単純であることが分かるだろう。

● アルチュセールはそれをどのように描きだしたのか

『資本論を読む』において、確かに彼は「共時—通時」という（いかにも構造主義的な）概念の組み合わせを用いている。だが、アルチュセールの「共時態 synchronie」と「通時態 diachronie」の概念は、きわめて異例なものである<sup>29)</sup>。まず共時態の方から検討しよう。これは一般的な使い方、つまり歴史という時間軸に垂直な切断面としての共時態ではない。（むしろそれはヘーゲルによるイデオロギー的形態であるとされる。）アルチュセールの共時態は、われわれが述べてきた「複雑な対象」、つまりマルクスの対象、異なるリズムを持ったさまざまな諸構造がたがいにズレを孕みながら接合されている全体という対象を描きだしている。

それは依存と接合の諸関係についての認識であり、その認識は依存と接合の有機的総体つまりシステムをなす。共時的なもの、それはスピノザ的な意味における永遠性であり、その対象の複合性について十全に認識することによる、複合的な対象についての十全な認識である。・・・共時態は単純な具体的な時間的現前とは何も関係はなく、総体を総体たらしめる複合的な接合についての認識にかかわるものである。・・・それは認識の対象の複合性についての認識であって、現実の対象についての認識を与えるものである。[Althusser 1996, p.294]

それは徹頭徹尾、概念的な産物であり、彼の言葉を借りれば、「システムあるいは思考の全体において概念の組織構造を表象＝上演する」ものである。それは永遠の様相における、「多様な時間性の構造的諸水準が干渉しあうような社会的全体」の認識である。われわれは構造的因果性をシステムの動態そのものを捉えようとする概念であると理解してきた。しかしこの「理論」としての共時態の中には、運動や生成の概念は含まれていないように見える。まして永遠の相の中に、過程としての「時間」はどこにあるというのか。

それは「共時態」から派生する「通時態」の中に存在している。通時態とは、記述された論

証のなかで営まれる「概念の運動」である。（「通時態、それは整理された証明のディスクールの中の概念の継起の運動をあらわしている。」）誤解を恐れずにいえば、通時態とは「思考の全体」において捉えられた諸概念の運動のシュミレーションであり、その実現である。共時態とはそれゆえ、徹底的に潜在的なものである。一般的な意味での構造は、この共時態の中にある異なる時間性の排除によって、その現前が可能となる。

アルチュセールがここで想定している共時態とは、互いに排他的な構造の共存をゆるす理念的（超越論的）な場である。もはやそれを写し取るように表象することは不可能である。その現前は通時態として、つまり運動する概念としてのみ可能となる。だがこの記述はいくらか危険である。あたかも、異なる時間性が共存することにより過剰決定された超越論的構造が「前もって」どこかに存在しているかのように読めるからである。だがそれはどこにも「存在」してはいない。複数の時間性の共存、過剰決定された「全体」の秩序は、そのままでは写し取ることはできない。それは局所的な過小決定された部分対象の不可能な総和である。それは互いに異なるリズムを持ち、ズレと矛盾に満ちている。それはまさに思考のシステムにおいて上演 darstellen すること、その過程においてのみ存在する。それゆえ共時態とは、なにものかの表象などではなく、むしろ過小決定された局所場としてしか捉えることのできない「多様体」についての認識であり、それぞれの局所場が、たがいに結びつき、依存していることについての、つまり彼のいう「接合」についての認識なのである。それは理念としては存在するが、しかし事後的なかたちでしか表象できないものである。つまり、理念的存在としての共時態は、複数の時間構造によって事後的に構成されるというかたちでしか表象しえない。それは過剰決定された、「理論における現実の対象」となるであろう。この両者の運動こそが構造的因果性を特徴づけるものである。

いくら抽象的な議論に深入りし過ぎたかもしれない。むしろここで注目すべきは、アルチュセールの通時態のきわめて特異な使い方である。共時態はある意味で、通時態としての「読む」という実践、あるいは主体の介入の中で実現される。だが通時態はつねに部分的な形にとどまる。なぜなら、それは介入によって生み出される時間構造を持たざるをえないからである。時間構造の生成を考慮に入れるかぎり、われわれはもはや全体を一挙に把握することはできない。つねに部分的な知識による認識生産、新たな内在性の平面を作りつづける認識の運動があるのみである。だれも同時に二つの時間平面に属することはできない。記述とは（つねに過小決定された）上演である。アルチュセールはこの過小決定によって特徴づけられる「運動＝過程」としての理論の側面を、徐々に重視するようになる。それが彼の後年のいわゆる「自己批判以後」の理論的展開を用意する。

#### ● 理論的实践から理論闘争へ。

アルチュセールの構造的因果性は、複合的な対象について理論であり、そこで認識が果たす

役割についての理論である。もはやこのような認識の後では、理論は何を知っているかではなく、この理論は何をしようかによって判断される。だがこれは、スターリン主義的な理論にたいする実践の優位を意味するものでは全くない。今まで述べてきたように、理論的実践の「意味」とは、つねに（前もって予見できない）その効果においてのみ、つまり理論の運動の過程によってのみ決定されるということである。哲学を実践のなかへ投げ込み、「知る」という概念に不可避免的に含意される静的な性格に、動的な性格を付与すること、特定の状況、特定の文脈に介入し、新たな局面を作り出すことである<sup>30)</sup> 特権的、超越的な視点を排除する闘争の内在的平面の中に、みずからの哲学を定立させること。アルチュセールは、これ以後このような実践をみずから生きることになる。われわれはここに容易に「フォイエールバッハ・テーゼ」の残響を聞きとることができるだろう。

#### おわりに——不確定な唯物論

「傾向とは、直線的な法則という形式あるいは姿をしてません。他の傾向との出会いの効果のもとで分岐し、それが無限に続くのです。交錯するごとに、傾向はあらかじめ予測しえない道をたどります。それは不確定 *aléatoire* だからです。」[Althusser 1994, p.45]

上に引用したのは、アルチュセールとフェルナンダ・ナバロとの対話の中の一節である。そこで彼はエピクロスの名前を上げ、偶然と分岐に満ちた不確定な唯物論という、ほとんど呆然とするような古代的な哲学を語っている。そこには最終的な決定因は存在せず、複数の「諸傾向 *tendance*」の出会いが、予見できない分岐（偏倚＝クリナーメン）を生み出す。これはもはや理論というよりは一つの夢、イメージというべきだろう。しかし厳密な思考を放棄したかのようにみえかねないこの立場は、まさにわれわれが過剰（過小）決定、そして構造的因果性をめぐって行ってきた考察を、年老いたものにだけ許される率直さで語ったものであると言えないだろうか。

われわれは時間の概念を軸にしてアルチュセールの議論を追いかけてきた。しばしば曖昧であると批判されてきた彼の思考のなかにある厳密な構造を探るためである。それがこの護教論的な小論の目的のほとんどすべてであり、それ以上何も付け加えるものはない。だが、言うまでもないが、あくまでこれは出発点にすぎない。われわれはまだ何もなしてはいない。アルチュセールの理論的展開は理論の意味を変えてしまった。もはや何かを解釈することが問題なのではない。理論的実践を生きること、そして内在性の平面を構成すること、それが『科学者のための哲学講義』から『国家のイデオロギー装置』に連なる、彼の認識論的でもあれば、同時に

政治的でもある理論的実践が語りかけていたことに他ならない。そしてそれを自己のおかれた状況において反復し、この内在性の唯物論のなかにとどまることが、われわれに要請されていることなのである。[20, Dec, 1996]

# 注

- 1) たとえば G.A. コーエンは『マルクスのために』の与えた社会的影響については一定の評価を与えつつも、『資本論を読む』を「決定的に曖昧である」と評している [Cohen 1978]。近年でも C. ムフと E. ラクラウはとりわけ後者の「構造的因果性」の概念を経済決定論という「本質主義」への譲歩であるとして批判している [Laclau & Mouffe 1985]。
- 2) その意味では、確かに彼は「西欧マルクス主義」の系譜に連なることになる。[Jay 1984] [Balibar 1991]
- 3) この点について例外といえるのはラクラウとムフである。彼らの立論については、必ずしも賛成できない。しかし少なくとも、そこには「分析」の試みは存在する。
- 4) この概念（過剰決定、重層的決定、多元決定）は精神分析において、二通りに解釈されてきた。まず(1)無意識の形成物はいくつもの原因によって生成され、ただひとつの原因によっては十分に説明されない、ということ。そして(2)この無意識を形作る様々な要素は、解釈の水準のとり方によって、一貫した意味を持つ複数の系列に組織することができるということ。[Laplanche & Pontalis pp.308-10]
- 5) こうした概念の輸入とその概念の記述の対象との関係については「フロイトとその発見」と題された興味深いテキストを参照せよ。  
「実際、注目すべきにもかかわらず、見過ごされてきたこと、それはフロイトは、その死まで、絶えることなく、彼の思想、概念、そして自ら一般的仮説と呼んだものを訂正し続けたということでした。・・・フロイトは絶えずその基礎となる仮説を変更し続けましたが、彼が変えたのは、無意識の存在とその発現ではなく（フロイトはけっしてその現実性を疑いませんでした）、この無意識の存在についての理論的表現だったのです。」[Althusser 1993, p.205]  
この章句はまるでアルチュセール自身の取り組みについて語っているかのようである。
- 6) 例えば、(ある体の上の)線形空間  $V$  から  $W$  への写像を考えたときに、 $\dim V < \dim W$  となっている場合を思い描けばいい。(連立一次方程式で書けば  $f = Au$  ここで  $A$  は  $i \times j$  行列で、 $f, u$  はベクトル。ただし  $i > j$ 。)
- 7) これは無意識におけるイメージの重層性を説明する比喩としては、よくできていると言うべきだろう。じっさい、ラクラウとムフはこの図式を採用し、具体的矛盾の発生の「論理的保証」とした。ただし肝心な点についての誤解（とりわけ浮遊するシニフィアンをめぐるそれ）もあって、彼らの試み自体は成功しているとはいいがたい。そこでは社会は象徴秩序の水準でのみとらえられてしまっている。
- 8) このことは最近になってようやく指摘されるようになっていく。たとえば [Balibar 1996]
- 9) 普通、写像といえば一対一を指すために、この一対一写像という表現はきわめて異例な表現である。その含意は「一対一でない写像」、松野が言うところの「一対多の写像」と対立させるためである。
- 10) 「運動に関する全自由度数（未知数の数）は、もしそれが可算であるならば、運動法則の内に含まれる独立な拘束条件（方程式）の総数と一致する。一方運動自由度が非可算であるとしても、個々の運動自由度とそれに一対一の対応関係を持つ拘束条件が認められる限り、運動に不定さが入り込

むことはない。」[Matsuno 1989, p.12] この場合、要するに運動方程式が未知数とうまく対応して、解が一意に定まっているということである。

- 11) 「一対一型写像の運動法則は、・・・運動に関するすべての自由度について各々での境界条件が完全に、かつ一切のあいまいさを含むことなく指定されているときに限って正当に機能する。」[ibid, p.12] ただし実際はアボガドロ数程度の要素が存在する場合（熱力学）、完全同定は不可能であり、集団における統計平均や偏差でもって、個々の境界条件の完全な制御にかえていいる。
- 12) たとえば孤立系において、すべての物理的運動法則はエネルギーの保存則を満たさなければならないが、一対一型写像を前提する限り、理論上はエネルギー分布は運動の各点において一意に決定しうろはざである。「運動に関する全自由度数は、もしそれが可算であるならば、運動法則の内に含まれる独立な拘束条件の総数と一致する。一方運動自由度が非可算であるとしても、個々の運動自由度とそれに一対一の対応関係を持つ拘束条件が認められる限り、運動に不定さが入り込むことはない。」[ibid, p.4]
- 13) このことを明らかにし、実際に（生物学の分野で）理論化を試みたことが、松野の最大の貢献である。
- 14) 「なぜならすべての知は全体に内在する原理の知に他ならないのだから。哲学は、どれほど遠くに進もうとも、この絶対的地平の限界を越えることはできない。たとえ哲学が「知」という翼を手にしても、哲学はいまだ今日というこの日に属しており、自らを反省する、自らについての概念の現前を反省する現在でしかない。明日という日は哲学には禁じられているのだ。」[Althusser 1996, p.278]
- 15) 「通時的なるものは一時的な連続性の場面におけるこの現在の未来にすぎず、また、結局は歴史に還元されてしまう事件（レヴィーストロースを見よ）は時間の連続の中で継起的な偶然性の現前にすぎなくなる。共時的なるものとしての通時的なるもの、それは第一の概念であるが、時間についてのヘーゲル的概念の中でわれわれが解明した二つの特徴を前提している。つまり歴史的時間に對するイデオロギー的概念である。  
この概念はイデオロギー的である。なぜなら歴史的時間をこのように考えることは、経済的、政治的、宗教的、美的、哲学的など、つまり社会全体の結び付きを作り出しているある種の統一からヘーゲルが握ねあげた概念を単に反映しているだけであるから。そしてヘーゲルの全体は精神的全体であり、ライプニッツ的な意味で、すべての部分がそれぞれに共感しており、個々の部分は「全体的部分」であるようなものだから。歴史的時間の二つの側面（連続－同質／同時性）の統一はそこで可能であり、また必然でもある。」[ibid, pp.278-9]
- 16) 未来も過去も同じ現在という平面の中に回収され、意味づけられる。未来についての認識、不確かなものについての認識、すなわち「政治」はこの体系の中では場所を持たない。それゆえ政治は「最終審においては」哲学、まさに「切断」を可能にする絶対的主体の側に回収されるだろう。
- 17) そしてその難点を解決するために時間地平を拡大し、一度きりの市場という永遠の時間を導入することによって貨幣そのものが不要になるというパラドックスは貨幣の特殊な性質を示唆する。これらの点にかんして、詳しくは[塩沢 1983]を参照せよ。
- 18) じっさい経済学もこのような「場」のメカニズムそのものには、無関心であった。一般に経済学では、ある財が北海道にあらうと、沖縄にあらうと、その理論の内部においては取りたてて区別はされない。
- 19) 効用の最大化（つまり模索の過程）は、いわゆるナップザック問題なのである。ナップザック問題とは、ナップザックにいろいろな商品をどのように詰め込めば一番得になるか、という単純な問題のことであるのだが、いわゆるNP困難（解はあるはずなのに計算困難）な問題の例であること



を彼は明らかにしている。(詳しくは[塩沢 1990, pp.181-8]を参照)

- 20) どちらも不動点定理のモデルである。[森 1976, p.58]を参照せよ。ちなみに(新古典派)理論に厳密に忠実であろうとすれば、バブルは権利上存在しない。それが存在したとすれば、現実が間違っているのである。
- 21) 彼は、二つの視点をアジョイント、——カテゴリー論で用いられる概念、例えば経済学ではミクロ経済学においてしばしば用いられる相対性などを思い浮かべればよい——として、つまり表裏一体の関係として捉らえている。あくまでこの内的／外的視点の区別は位相的な意味でのそれであることに留意されたい。
- 22) この論文は、デリダの指摘を契機として、近年アルチュセールの構造的因果性あるいは、全体性の概念を理解するさいに、しばしば言及されている。とりわけ時間性の概念をめぐるのは「アルチュセールの認識と実践」[宇城 1993]を参照されたい。またそこでは、アルチュセールのこうした取り組みと、(例えば「哲学の闘技場」などといった)後年の「闘争」概念とのつながりがあわせて検討されている。そしてわれわれがこれから検討する論点自体も、同じことを別の角度からより凡庸に述べることにほかならない。
- 23) そこから論理の一貫した記述を行うことも不可能ではない。例えば[竹内 1982]の直観主義の理解を参照。それはきわめてわかりやすいイメージをわれわれに与えてくれる。
- 24) これを論理的に形式化するならば、(たとえば直観論理のような)多値論理のかたちをとるだろう。また[廣松 1977]にも同様の指摘がなされている。
- 25) [森穀 1976]を参照せよ。コンパクトなものであるが、この論文の範囲内では、これで充分である。またこの点にかんしては郡司の一連の論考、ここでは特に[郡司 1992]を参照せよ。そこでは松野の論考から出発し、有限時間の観測過程と自己言及構造との論理的連関が、クリプキらを例に挙げて検討がなされている。ローヴェル風の不完全性定理の簡単な証明があって便利である。
- 26) あるいはカヴァイエス(J. Cavaillès)の諸論文が影響を与えたのかもしれない。ちなみにカヴァイエスは『資本論を読む』の中で、カンギレーム、フーコーと並んでいささか唐突に言及されている。
- 27) 『資本論を読む』について主題的に扱ったものは彼のイデオロギー論を扱ったものと比べるとそれほど多くはない。これについては、[阪上 1972](とりわけ(1))を参照せよ。
- 28) 注意すべきは、アルチュセールがeffetというとき、(日本語でいえば)結果という原因を想起させてしまう訳語より、むしろ効果というそれ自体が構造の一部であることを含意する訳語において理解すべきだろう。構造的因果性とは、まさに過程と運動を描きだす概念であるのだから。
- 29) とりわけ後者は、共著者ともいえるバリバルのそれとも異なっている。
- 30) この点にかんしてもっとも重要な書物は、『科学者のための哲学講義』である。それは内在性の哲学を内部から構成する試みである。ところで、この論文のようなアルチュセールの思想の「説明」は、彼のこうした哲学に忠実であろうとするならば、全く不十分なものであり、後ろ向きなものにすぎないことをここで自己批判しておく。

## 参 考 文 献

- Althusser, L. 1969, 『『資本論』第一巻の読者へのまえがき』, 『歴史・階級・人間』  
 ... 1974, 『歴史・階級・人間』, 福村書店  
 ... 1974b, *Philosophie et philosophie spontanée des savants*, Maspero,

- (『科学者のための哲学講義』, 福村書店)
- ... 1976, *Positions*, Éditions sociales
  - ... 1986, *Pour Marx*, Découverte, (『マルクスのために』, 平凡社)
  - ... 1993, *Écrits sur la psychanalyse*, Stock/IMEC
  - ... 1994, *Sur la philosophie*, Gallimard
  - ... 1996, *Lire le Capital*, PUF
  - Balibar, E. 1991, *Écrits pour Althusser*, Découverte
  - ... 1996, "Structural Causality, Overdetermination, and Antagonism" in A. Callari and D.F. Ruccio (eds.) *Postmodern Materialism and the Future of Marxist Theory*, Wesleyan University Press
  - Bergson, E. 1889, *Éssai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, (『時間と自由』, 白水社)
  - Cohen, G.A. 1978, *Karl Marx's Theory of History*, Clarendon Press
  - Elliott, G. (ed) 1994, *ALTHUSSER... A Critical Reader*, Blackwell
  - 郡司 幸夫 1992, 「"進化"を生成する自己言及システム」, 『数理科学』 No.350
  - 廣松 渉 1977, 『科学の危機と認識論 (新版)』, 紀伊國屋書店
  - Hobsbawm, E. 1966, "The structure of Capital", in Elliot (ed), *ALTHUSSER... A Critical Reader*
  - Jay, M. 1984, *Marxism and Totality*, University of California Press
  - Laclau, E. & Mouffe, C. 1985, *Hegemony and Socialist Strategy*, Verso (『ポストマルクス主義と政治』, 大村書店)
  - Matsuno, K. 1989, *Protobiology: Physical basis of biology*, CRC Press (『プロトバイオロジー』, 東京図書)
  - 森 毅 1976, 『無限集合』 共立出版
  - Rosanvallon, P. 1979, *Le Libéralisme économique*, Seuil, (『ユートピア的資本主義』, 国文社)
  - 阪上 孝 1972, 「アルチュセールのイデオロギー論(1)(2)」, 『人文学報』, No.33, 36
  - 塩沢 由典 1983, 『近代経済学の反省』, 日本経済新聞
  - ... 1990, 『市場の秩序学』, 筑摩書房
  - 竹内 外史 1982, 『数学的世界観』, 紀伊國屋書店
  - ... 1978, 『層・圏・トポス』, 日本評論社
  - 宇城 輝人 1993, 「アルチュセールの認識と実践」, 『情況』 Nov.
  - Varela, F.J. 1979, *Principle of biological autonomy*, North Holland
  - 渡辺 慧 1975, 『時』, 河出書房新社